ルイス・キャロル

6　ふたりの兄弟

トゥワイフォード学校に　ふたりの兄弟がおりました
　学校からの帰り道
「ギリシャ語　ラテン語　勉強するかい
　ぼくとかけっこしてみるかい
それとも　むこうの橋まで行って　5
　ウグイ釣りをやってみるかい」

「ギリシャ語　ラテン語　大嫌い
　かけっこもあんまり得意じゃない
だから　むこうの橋まで行って
　ウグイ釣りをやってみよう」　10

兄は釣竿を二本つないで
　もう一本をつないで延ばし
本(ブック)にはさんだ鉤針(フック)を取り出し
　弟に突き刺しました

遊びで豚をぶつ時は
　少年たちは大騒ぎ　15
でも弟はもっと大声で喚きました
　橋の上から投げ落とされたとき

魚が群になってやってきました
　餌をつつこうと狙っています　20
投げ落とされた弟はちょうどいい柔らかさ
　魚は食欲をそそられました

「弟がじたばた　もがいても
　魚は好きにつつけるさ
ぼくが魚を釣ることは　弟にはいつも喜び　25
　だから今度は　獲物(ティーズ)を追うという意味を教えてやろう」

風が弟の声を運んできました
　「兄さん　こんなことしないでよ
ぼくがいったい何をしたの

　人殺しの喜びにふけるなんて　30

「見てるだけなら
　舐めたり噛んだりは楽しいよ
でも　魚に噛まれるのはいやなんだ
　ぼくの体を噛まれるのは
腕の周りにウグイの大群　35
　スズキが膝にまとわりつく

「喉は渇いていないんだ
　魚ももうたくさんだ」
「何があっても怖がるな」と兄は言いました
　「ふたりとも似たようなものだから　40

「ぼくたちの立場は似たようなもの
　（人殺しは別として）
橋の上にはぼくの釣竿（パーチ）
　水の中にはおまえのスズキ（パーチ）

「ぼくは釣竿（パーチ）に　スズキ（パーチ）はおまえにご執心　45
　とってもよく似てるじゃないか
橋の上には料金所（ターンパイク）
　おまえは間もなく　カマス（パイク）と一緒にターンする」

「お願いはひとつだけ　魚に食われてしまうなら
　（ねえ　餌は弟なんだよ）　50
その魚を釣り上げてよ　でも一撃くらわすときは
　そっとやさしくやってくれよ」

「マスならば　まずまちがいなく
　一瞬の稲妻のように　一撃かまし
カマスならば　一撃かまさず　55
　十分待って　息の根止めよう」

「その十分間に運命から見捨てられ
　弟は犠牲になるかもしれないよ」
「それじゃ五分に縮めよう　生き残れるかもしれないな
　その確率は五分と五分より少ないけれど」　60

「なんて残酷なんだ
　兄さんの心は鉄か岩か鋼鉄か」

「わからないな　心臓が動き出してから
　ずいぶん年をとったから

「魚をたくさん殺すのは　ぼくの心からの願い　65
　毎日毎日　ぼくの悪意は強くなる
そんなにたくさん殺しても　ぼくの心は柔にもならず
　むしろその逆なんだ」

「トゥワイフォード学校に戻りたいよ
　鞭（バーチ）に怯えて勉強しているほうがましだ」　70
「絶対にちがうよ」と兄は叫びました
　「スズキ（バーチ）とここにいるほうがましに決まってる

「今おまえは幸せだろう
　ただ遊んでいればいいんだもの
ここにあるのは一本の釣り糸　75
　一日三十本の鞭打ちよりはいいはずだ

「頭の上から
　鞭はいつ降り降ろされるか知れやしない
でも　それは学校じゃ当然のこと
　水の中じゃ心配するにはおよばない　80

「反り返った鼻先の年寄りカマスが見えるかい
　（もっと楽しい話題に変えてくれよ）
弟よ　兄弟愛を貫いてくれ
　そいつは川の中でぼくがいちばん好きなやつ

「明日　やつを食事に呼ぼう　85
　（そいつは大盤振舞いだ）
天気がよければ一筆したため
　何時に会うか決めるとしよう

「やつはまだ世間知らず
　行儀だって良くはない　90
ぼくが躾けるのは当たり前
　身だしなみを整えてやろう」

風に叫びが運ばれました
　「残酷な」「親切な」「人は動物より苦しみ多い」
兄はしばらく我慢して聞いていて　95

　頓智をきかせて答えました

「何だって　ごろごろ寝転んでいるよりも
　川で泳ぐほうがましだろう
鱗の光る魚（フィッシュ）が山盛りの皿（ディッシュ）を見ろよ
　自然がこんな絵を書くか　100

「何だって　魚を見ないほうが幸せだって
　生命力と喜びに満ちているのに
なんて馬鹿なんだ
　逃がすより殺すのがもっと嬉しいに決まってる

「大地や空や海の美学を　105
　何時間もべらべら喋るやつはいる
空飛ぶ鳥　跳ねる魚
　生命力と躍動感に満ちているとね

「視覚から得られる喜びは
　うすのろには確かにいいだろう　110
でもそれは子ども騙し　サケ釣りは
　その二十倍も楽しいんだ

「心正しき人々は
　もの言わぬ生き物を愛するとか
そういうやつの心は何のためにある　115
　ティ−ズ川から魚を釣り上げないならば

「友だちも家もおまえにやろう　ぼくは放浪の旅に出る
　銀行に預けたお金もやろう
これはぼくの望み　でも魚がなかったら
　ぼくの人生真っ暗闇」　120

家から妹が出てきました
　兄と弟はどうしているかと気になって
でも　その恐ろしい光景を見て
　妹は目に涙を浮かべました

「鉤針に付けている餌は何　125
　教えてちょうだい　お兄ちゃん」
「これはただのクジャクバト
　歌をうたわないからおしおきだ」

「ハトが歌をうたうですって
　なんて馬鹿なの　130
ハトの小屋(コート)は別のもの
　弟のコートとは違うのよ」

「鉤針に付けている餌は何
　教えてちょうだい　お兄ちゃん」
「ぼくの弟」と兄は叫びました　135
　「ぼくに呪いと悲しみあれ

「ぼくはほんとにひどいやつ
　こんなことがありえようか
さよなら　さよなら　妹よ
　ぼくは海にでてゆくよ」　140

「いつ帰ってくるの
　教えてちょうだい　お兄ちゃん」
「チャブがご馳走になったとき
　そんなことはありえないけど」

妹は右へくるりと回り　145
　心臓が三つに割れました
「弟はずぶぬれで
　お兄ちゃんはお茶(ティー)には間にあわないわ」

（中島久代訳）